



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	幼児期における着脱に関する研究：着脱パターンの解析 およびボタンかけと手指の巧緻性の関連性(論文要旨)
Author(s)	高橋,美登梨
Citation	
Issue Date	2018-09-25
URL	http://hdl.handle.net/2309/150390
Publisher	
Rights	

氏 名 : 高橋 美登梨
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 314 号
学位授与年月日 : 平成 30 年 9 月 25 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 幼児期における着脱に関する研究
—着脱パターンの解析およびボタンかけと手指の巧緻性の関連性—
論文審査委員 : (主査) 教授 川端 博子
(副査) 教授 首藤 敏元 教授 薩本 弥生
教授 池崎 喜美恵 教授 吉川 はる奈

学位論文要旨

基本的な生活習慣は生涯にわたる自立した生活の基本であり、幼児期に家庭保育と集団保育において繰り返し行う中で習得していく。幼児教育に関する 3 法令において、生活習慣は自立心や思考力の芽生えと関わりと捉えられており、見通しを持って行動することが生活の自立につながるといえる。生活習慣の中でも着脱は、動作を習得することで着脱を習慣的に行えるようになるため、着脱の自立には動作の習得が重要となる。本研究では、幼児期における着脱動作の特徴を捉えることにより、着脱が育む教育的価値を明らかにするとともに習得段階に応じた衣服の形態と保育者の援助について提言することを目的とした。集団保育の保育者を対象に着脱に対する意識を調査して実態を明らかにした上で、幼児期における着脱の特徴を明らかにするために、動作パターンの解析、習得段階の幼児への援助の観察、ボタンかけと手指の巧緻性の関連の検証を行った。本研究によって得られた成果を以下に示す。

第 1 章では、幼児期における着脱に関して、着脱動作と衣服の形態の関連、動作パターンからみた着脱、着脱と手指の巧緻性の関連について先行研究を概説した。生活習慣は家庭保育と集団保育を通じて習得していくが、これまでは家庭保育が主な研究対象であり、家庭での保育者への質問紙調査によって行われていた。本研究では集団保育の衣生活に視点を当てることとし、幼児期の着脱を動作パターンや手指の巧緻性との関連から考察することの意義について述べた。

第 2 章では、集団保育の保育者を対象に質問紙調査を行い、集団保育における衣生活に対する意識や教育的効果等を明らかにして、第 3 章から第 5 章の基礎資料とした。衣生活の実態としては、集団保育の中で着替えを行う機会があり、3 歳児から 5 歳児の間に留め具の操作や衣服の管理を習得し、衣服の形態を理解すると推察された。着脱の習得に対して、保育者は「自立心」との関連を強く意識していることが明らかになった。さらに、保育者は生活動作を行う場面で手指の巧緻性の低下を感じていることが分かった。

第 3 章では、自立して動作を行える 5 歳児を対象として着脱の動作パターンを明らかにした。かぶり型衣服 (ニット製) の脱衣は、「腕から抜く型」、「裾を持ち上げる型」、「首元から抜く型」の 3 パターンに分類でき、「腕から抜く型」が最も多く行われていた。前あきボタン付き衣服の着衣では、若年女性と同様に一方の腕に袖を通してからブラウスを背中にまわし他方の腕を通すプ

ロセスで行っており、5歳児で羽織る動作は習慣化されているといえる。ボタンの操作には前腕の回旋運動を伴っており、ボタンかけと手指の巧緻性の関連について第5章にて検証することとした。下衣の着脱時における体位は、立位と座位が観察され、全身運動との関りがあると考えられた。

第4章では、3歳児の着脱に着目し、第3章で示された5歳児の動作パターンを基に動作の特徴を考察した。保育者が幼児を援助（手助け）する内容を整理したところ、かぶり型衣服の脱衣では主に「腕や頭を抜く」、着衣では「はおらせる」に対して最も援助が行われていた。動作のパターンを観察したところ、被り型衣服の脱衣は5歳児と同様に「腕から抜く型」が多く、保育者の援助が行われたといえる。前あきボタン付き衣服の着衣では、衣服の形態を確認してから動作を開始する様子が観察された。さらに保育者の援助は「はおらせる」に対して多かったことから、3歳児では衣服の形態と「はおる」動作の関連を理解することが課題のひとつであるといえる。下衣の着脱時の体位は、立位と座位が観察され、立位で行う割合は5歳児と比較すると少なかった。また、立位で行う者のうち、机や保育者に手をかけて行う例も観察されたことから、座位から立位への発達の過程で身体のバランスをとるために何かに手をかけて動作を行うといえる。

第5章では、ボタンかけと手指の巧緻性の関連について5歳児を対象に検証した。ボタンかけは所要時間の測定と動作パターンの観察、手指の巧緻性はビーズ通しテストとひも結びテストにより測定し、ひも結びでは動作パターンの観察を行った。ボタンかけの平均所要時間は、個人差が大きく、月齢の影響を受けるものの男女差は認められなかった。ボタンをボタンホールに通す際の左右の手指の動作に着目してパターンの観察したところ、「押し通す型」と「つまみ出す型」の2つに分類でき、所要時間は「つまみ出す型」の方が長かった。手指の巧緻性に用いた2種のテストの測定結果はいずれも女児のほうが成績がよく、5歳児における手指の巧緻性には男女差があることが示された。ひも結びテストの動作パターンを観察したところ、左右の手の協応が必要な操作プロセスにおいて操作をスムーズに行えない幼児がいた。手指の巧緻性の結果に順位付けを行いボタンかけの所要時間との相関をみたところ、手指の巧緻性の高いほどボタンかけの所要時間が短いことが示唆された。さらに、ボタンかけおよびひも結びを観察したところ、いずれの動作とも左右の手の協応が発達途中である幼児がいた。

第6章では、第2章から第5章で得られた結果を述べた上で、研究成果に関する今後の展開として次の2点を示した。

①着脱の習得段階における衣服の形態と保育者の援助

着脱を習得段階の幼児が保育者の援助を必要とする「はおる」は織物の前あき衣服、「腕や頭を抜く」はニット製衣服によって習得していくと考察される。保育者は、幼児にとって難しい動作を理解した上で援助するとともに、幼児期には多様な形態の衣服を着用することが重要であるといえる。

②ボタンかけと手指の巧緻性の関連性

ボタンかけが手指の巧緻性と関連することは、生活動作によっても手指の巧緻性を向上させる可能性があることを示したといえる。手指の巧緻性は児童期以降の学習活動にも関わる能力であり、幼児期より日常生活において手指を動かす機会を増やすことの重要性を示したと考える。